

糖尿病エンパワーメント・患者中心の医療の現場を訪ねて

毛利 貴子

糖尿病を持つ人たちが、糖尿病は自分の力でコントロールできることを発見するようお手伝いするというエンパワーメントの理念に共感していた私は、その実際を見学したいとミシガン大学公衆衛生大学院の岡崎研太郎先生に相談し、ミシガン大学糖尿病リサーチトレーニングセンターのBob Anderson 先生を訪ねる機会を得た。糖尿病以外の領域での同様なアプローチを探しているときに会った本、「患者中心の医療」に書かれた、患者を疾患と病を持つ人間としてとらえ、医師と患者が力を分かち合う新しい臨床技法への興味も膨らみ、畏れ多くも著者の方々にメールを出し、カナダのウエスタンオンタリオ大学を訪問する機会も得ることができた。

ミシガンでは、センターの方々との面接に加え、先生方の外来も見学させていただいた。1型糖尿病の方々を中心にインスリン強化療法の治療を専門にされている Arno Kumagai 先生の外来を中心に紹介したい。

来院される方々は、平均3カ月に1回の平均受診でほとんどポンプを使用しておられた。フェローの先生の子診をふまえて、治療方針まで含めたディスカッションの後、一緒に待つブースを訪れる。Kumagai先生と彼らの面接時間は一人当たり30分前後だが、様々な感動の場面の連続だった。「人工臓器だと2型糖尿病の人のようになると聞いていたのに、免疫抑制剤を飲んで余計血糖コントロールが悪くなっている。」と涙ながらに話す、パキシルを内服中の36歳の女性。フェローの先生にクレイジーと言われた、朝から晩までスナックを食べている33歳の女性。医学部合格と嬉しい報告をした20歳の女性。「これまでは自分の人生の中では糖尿病がすべてで、自分が何者か



Bob Anderson 先生ご夫妻と筆者

という前に糖尿病しかなかった。」

Kumagai 先生は、彼らの状況に応じ、しっかり傾聴されたうえで彼らが自分で目標の設定ができるように促す。そこには何か不思議と感情を吐露できる空気が存在していたようであった。

続いて、ミシガン大学家庭医療学科に留学されている吉岡哲也先生と一緒にウエスタンオンタリオ大学を訪問した。何の肩書もない私達を、Moira Stewart 先生はじめ、著者の方々は温かく迎え入れて下さり、その医療の教育と実践について教えていただいた。私たちが訪問した家庭医療学科でまとめられた患者中心の医療モデルは、今や医療面接のスタンダードとして医学部全体の教官に評価、指導できることが求められていた。模範ビデオでは、患者が感情を表現できるように促す医療者の態度が印象的であった。参加させていただいた外来のミーティングは、学生、ソーシャルワーカー、精神科医、看護婦、医師らで構成され、学生の時から患者さんを病いを持つ人として共感(empathy)し、理解するためのトレーニングがなされており、私は大変うらやましく思った。

最後になったが、今回の訪問を通して、私自身も皆様にパワーをいただいた気がしている。この場をお借りし、背中を押して下さい皆様方に心よりお礼申し上げます。M

もうり たかこ
佐賀医科大学総合診療部
(〒849-8501 佐賀市鍋島5-1-1)